

フリック・ウルリッヒ「山という空間」

日本留学についてのエッセイを書かないかと依頼された時、何を書けばよいのかとても迷いました。日本に滞在した期間は決して短くはなく、様々な人との出会いや思い出はあまりにも多いからです。また、一昨年に起きた東日本大震災のような歴史的な出来事にも遭遇し、正直、何について書けばよいのか、わかりませんでした。考えた末、私の趣味にまつわる少し不思議な現象について書くことに決めました。私の人生はまだそれほど長くはありませんが、これまでいろいろな国を回り、様々な文化と接してきました。これまでの経験に基づいて考えると、日本は地位やマナー、社会に対して求められる役割など、社会的制限が多い国だと思います。同じような制限はどの国や社会にも存在しますが、日本においては特に多い印象を受けました。このような制限は基本的に日常生活の中で人と人との間の交わりの際に作用し、ある意味で人と人との間の壁をつくりませんが、しかし、しばしばそのような制限から脱した場に出会います。

私は小さいころから高所恐怖症なので、子供の時、山は私にとってとても怖いものでした。しかし、ヨーロッパアルプスの麓で育ったという背景があるからかもしれませんが、山は私にとって不思議な吸引力を持っていました。ドイツ語には「山から呼ばれる」という表現がありますが、正に山からの声がずっと私の耳に届いていたかもしれません。大学に入ってから、よく近辺の山地へハイキングに出かけましたが、本格的に登山を始めたのは実は日本に来てからです。これまで東北と関東を中心にいろいろな山に登ってきましたが、ほぼ毎回、同じような不思議な現象を体験しました。それは登山者同士、人にもよりますがまったく知らない人でも先に記した制限をあまり感じないことです。その例として、一つの出来事を次に記したいと思います。

二年前、秋から冬にかけての時期、一度、東京都最高峰の雲取山に登りました。雲取山のほとんどのコースは日帰りができないため、途中で泊まるしかありません。そのため私は、雲取山にある山小屋に宿泊することにしました。山頂から日没を見てから、宿へ降りて、他の登山者の方と少しおしゃべりした後、しばらく東京の夜景を楽しみ、最後に夜の寒さから炬燵に引きこもりながら、夜を過ごしました。ご来光を見るため翌朝未明に宿から出発しました。山頂から見た、朝日に当たる富士山は本当に絶景でした。暖かい日差しで足を温めてから、奥多摩の方へ降りはじめました。途中、奥多摩の方から登ってきた登山者の方に道について聞かれました。時間はすでに進んでいたもので、これから登ると、山に泊まるしかないと説明した後、また別れましたが、しばらくしてまたその方に会いました。やはり引き返すことに決めたようです。それから一緒に降りることにしました。いろいろおしゃべりしながら、その方が私の住まいの町の郵便局に勤めており、同じく高所恐怖症であることがわかりました。集落の端に到着すると、道がわかりにくくなり、下山道でかなり迷いました。そこで同じように道に迷った登山者の方に出会いました。それをきっかけに話かけましたら、結局、三人で降りることになりました。最後に一緒に奥多摩温泉でゆっくり休んだ後、最初の方に家の近くまで車で送っていただきました。

同じ登山者同士ということで築かれた信頼関係を改めて実感いたしました。このような付き合いは、他の場面ではあまりありえないでしょう。おもしろいことに、ほぼ毎回山に登った時に似たような経験をしました。このような出会いから、どのような教科書や研究

論文にも載っていない、様々な話を聞くことができました。毎回、山の力はすごいと思います。多くの方に山という不思議な空間を体験していただきたいと願います。

